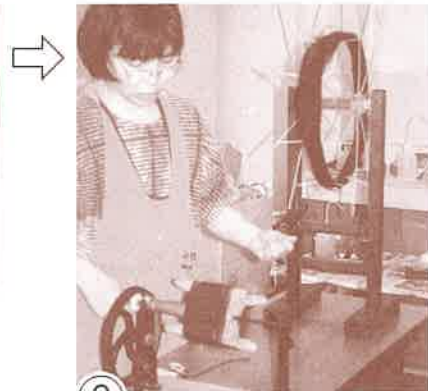


# 糸から布へ

はたお 機織りをするには、まず最初に、織り上げる布の長さ<sup>せいしよ</sup>と幅<sup>お</sup>から、タテ糸の長さ<sup>ぬの</sup>を決め、機織りに糸をかけていく「整経<sup>せいけい</sup>」という作業<sup>さぎょう</sup>を行<sup>おこな</sup>っていきます。  
 (郷土資料館 体験学習用高機 2枚綜統の場合より)



① 糸の準備  
織物に使う、タテとヨコの糸の量とデザインを決め、糸を染める。



② 糸をかせ車<sup>かせぐるま</sup>にかけ、多くの糸<sup>いと</sup>わくに巻き<sup>ま</sup>き<sup>ま</sup>わける。



③ 整経(タテ糸をかける)  
整経台<sup>せいけいだい</sup>に糸<sup>いと</sup>わくの糸<sup>いと</sup>をかけて、タテ糸の必要<sup>ひつよう</sup>な長さ<sup>ながさ</sup>と幅<sup>あ</sup>にそろえる。



⑥ チキリ<sup>ちきり</sup>にタテ糸<sup>たていと</sup>を取りつけ、糸<sup>いと</sup>が重<sup>おも</sup>ならないように巻<sup>ま</sup>いていく。



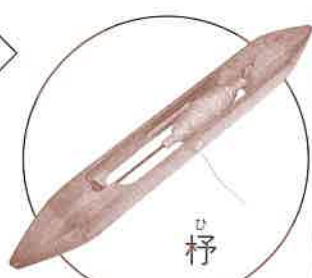
⑤ 2枚<sup>まい</sup>の綜統<sup>そうどう</sup>へ<sup>へ</sup>成<sup>おさ</sup>にとおた<sup>た</sup>タテ糸<sup>たていと</sup>を交互<sup>こうご</sup>にわけて1本<sup>いっぽん</sup>ずつ引き<sup>ひ</sup>こんでいく。



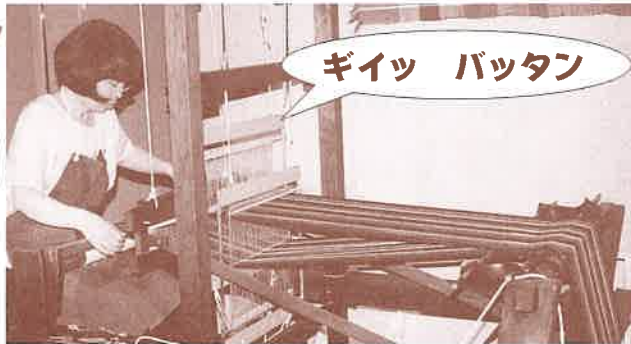
④ くし目<sup>くしめ</sup>状<sup>じょう</sup>に竹<sup>たけ</sup>をうすくならべた<sup>おさ</sup>箆<sup>へら</sup>に幅<sup>あ</sup>を決めた<sup>き</sup>タテ糸<sup>たていと</sup>の上糸<sup>うわいと</sup>と下糸<sup>したいと</sup>を順番<sup>じゅんばん</sup>にとおしていく。



⑦ タテ糸<sup>たていと</sup>をチマキ<sup>ちまき</sup>に巻<sup>ま</sup>きながら、タテ糸<sup>たていと</sup>の<sup>ちまき</sup>はりを調節<sup>ていせつ</sup>する。



⑧ 織る



さあ、ヨコ糸<sup>よこいと</sup>を巻<sup>ま</sup>いた竹管<sup>ちくかん</sup>を<sup>ひ</sup>杼<sup>ひら</sup>にはめこみ、タテ糸<sup>たていと</sup>にとおして織<sup>お</sup>りはじめましよう。

ギイッ バツタン

## 学習の手引 第30号

# はたおり



糸くり・はたおり・管まきのようす  
 (恒和出版『図譜 江戸時代の技術(下)』、「百人女郎品定」より)

## 広島市郷土資料館

☎ 734-0015 広島市南区宇品御幸二丁目6番20号

TEL (082) 253-6771

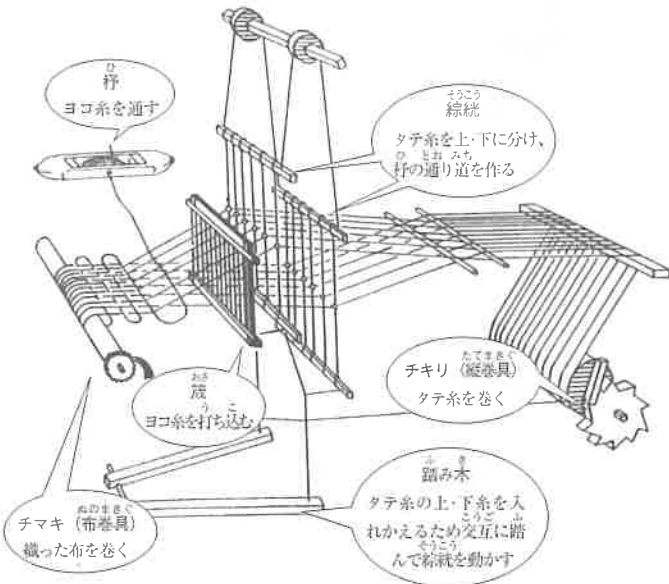
FAX (082) 253-6772

# ギョウ バツタン

はたおり上達へのコツ

「からだを使ってからだで覚える」

「織る」とは、2本の糸をタテとヨコに直角に交わらせ、それを組み合わせていくことです。そしてできあがったものが織物です。日本では昭和のはじめごろまで、主に家庭で女性の手によって作られていました。織物には、かいこのまゆが原料の絹織物、わたが原料の綿織物、羊毛が原料の毛織物、麻が原料の麻織物などがあり、きものや洋服、その他生活用品として使われています。織物を作るには、機織りを使います。まっすぐ何本もはられたタテ糸の中に、ヨコ糸を一本通して打ちこむ動作を繰り返して、織り上げていきます。



高機のしくみ (これは機台をのぞいた図です)

# はたおりの長い歴史

げんしばた 原始機



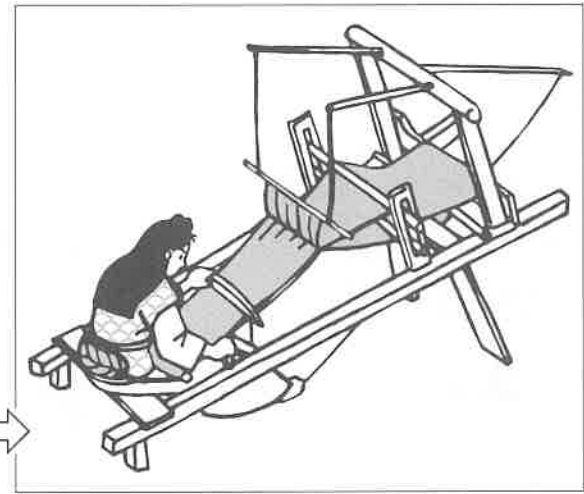
機織りが登場するまでの日本では、木や草などの繊維から糸をとって手編みで布を作っていました。機織りの登場は、縄文時代終わりごろから弥生時代はじめごろ (今から約2300年前) とみられています。そのころの機織りにはまだ機台 (機織りの各部品をのせる台) がなく、この形を原始機と呼んでいます。手編みと違い機織りには、タテ糸をいっせいに上下に分け、ヨコ糸の通る道を作る「綜絢」があることで、織りの作業が早く、きれいに織り目もそろい、便利になりました。

糸を巻くチキリは、木の幹などに結び付け、布を巻くチマキは、織る人のお腹の前に置き、腰あてで固定する。

じ ば た 地機

古墳時代 (今から約1600年前) に中国から伝わり、明治時代の中ごろまで幅広く人々に使われたのが、地機です。原始機に比べると思い通りに織れ、はるかに長い織物を作ることができるようになりました。江戸時代には麻に代わり、暖かく、丈夫で肌触りのよい木綿が人々に広まり、主に木綿用機織りとして活躍しました。

原始機を機台にのせた形で、織る人は地面近くに腰をおろし、足を前に投げ出し、足腰の力でタテ糸のはりやゆるみを加減しながら織る。



たか は た 高機

絹用の機織りとして地機と同じころ中国から伝わった高機は機台が高く、腰をかけて織ります (表紙)。綜絢が2枚が限度の地機に対して、綜絢を増やせる高機では生産がはかどり、さまざまな織り方ができるようになりました。高級な絹織物は使用が限られ、あまり広まりませんでしたが、朝廷の儀式用の織物などとして使われました。江戸時代中ごろになると、京都の高級絹織物、西陣織の技法が各地に伝えられ、また木綿用に改良された高機も登場し、高機は全国的に広まりました。しかし、明治時代になると西洋式の技術などを取り入れ、それまでの手作業の機織りから、機械の動力織機へと次第に代わっていきました。